

最小公倍数と通分

最小公倍数には3つの型があります。

2と3、2と5、2と7、
3と4、3と5、3と7
のように、

2つの数の積

が最小公倍数になる場合。

	$\frac{1}{2}$	+	$\frac{1}{3}$
=	$\frac{1}{6}$	+	$\frac{1}{6}$

	$\frac{1}{2}$	+	$\frac{1}{5}$
=	$\frac{1}{10}$	+	$\frac{1}{10}$

	$\frac{1}{2}$	+	$\frac{1}{7}$
=	$\frac{1}{14}$	+	$\frac{1}{14}$

	$\frac{1}{3}$	+	$\frac{1}{4}$
=	$\frac{1}{12}$	+	$\frac{1}{12}$

	$\frac{1}{3}$	+	$\frac{1}{5}$
=	$\frac{1}{15}$	+	$\frac{1}{15}$

2と4、2と6、2と8、
3と6、3と9、3と12
のように、

**大きい方の数が
小さい方の数の
倍数**

になっている場合。

	$\frac{1}{2}$	+	$\frac{1}{4}$
=	$\frac{1}{4}$	+	$\frac{1}{4}$

	$\frac{1}{2}$	+	$\frac{1}{6}$
=	$\frac{1}{6}$	+	$\frac{1}{6}$

	$\frac{1}{2}$	+	$\frac{1}{8}$
=	$\frac{1}{8}$	+	$\frac{1}{8}$

	$\frac{1}{3}$	+	$\frac{1}{6}$
=	$\frac{1}{6}$	+	$\frac{1}{6}$

4と6、4と10、
6と9、6と15、
6と8、6と10
のように、

**2つの数に
公約数がある時
2つの数の積を
最大公約数で
わって得られる**

場合。

	$\frac{1}{4}$	+	$\frac{1}{6}$
=	$\frac{1}{12}$	+	$\frac{1}{12}$

	$\frac{1}{4}$	+	$\frac{1}{10}$
=	$\frac{1}{20}$	+	$\frac{1}{20}$

	$\frac{1}{6}$	+	$\frac{1}{9}$
=	$\frac{1}{18}$	+	$\frac{1}{18}$

	$\frac{1}{6}$	+	$\frac{1}{8}$
=	$\frac{1}{24}$	+	$\frac{1}{24}$

分母の異なる分数の足し算の場合

何故、
分母を同じにしなければならないのか。

それは、
数学でいうところの足し算とは、
同じ大きさの個数を数えるのが
原則だからです。

例えば、
像1頭と、ネズミ1匹を足して
2つの何とか、というのは
意味をなさないので。

例えば、
千円札1枚と一万円札1枚とを足して
2枚のお札ではありますが、
その足した結果の2には
あまり意味がありません。
だから、
千円を、一円が1000個、
一万円を、一円が10000個とし、
合わせて、一円が11000個、
とするわけです。

例えば、
3百メートルと
3キロメートルを合わせて
『6何とか』は意味がありません。

$3 \text{ 百 m} = 1 \text{ m} \times 300$
 $3 \text{ キロ m} = 1 \text{ m} \times 3000$
合わせて $1 \text{ m} \times 3300 = 3300 \text{ m}$
とするか、

$3 \text{ 百 m} = 1 \text{ km} \times 0.3$
 $3 \text{ キロ m} = 1 \text{ km} \times 3$
合わせて $1 \text{ km} \times 3.3 = 3.3 \text{ km}$
とするかです。

いずれにしても、
単位の違う、つまり
大きさの異なる物の足し算は
単位をそろえてからでない
と意味が無いのです。

引き算についても同じです。

	$\frac{1}{2}$	-	$\frac{1}{3}$
=	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{6}$

	$\frac{1}{2}$	-	$\frac{1}{4}$
=	$\frac{1}{4}$	-	$\frac{1}{4}$

	$\frac{1}{4}$	-	$\frac{1}{6}$
=	$\frac{1}{12}$	-	$\frac{1}{12}$

	$\frac{1}{2}$	-	$\frac{1}{5}$
=	$\frac{1}{10}$	-	$\frac{1}{10}$

	$\frac{1}{2}$	-	$\frac{1}{6}$
=	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{6}$

	$\frac{1}{4}$	-	$\frac{1}{10}$
=	$\frac{1}{20}$	-	$\frac{1}{20}$

	$\frac{1}{2}$	-	$\frac{1}{7}$
=	$\frac{1}{14}$	-	$\frac{1}{14}$

	$\frac{1}{2}$	-	$\frac{1}{8}$
=	$\frac{1}{8}$	-	$\frac{1}{8}$

	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{9}$
=	$\frac{1}{18}$	-	$\frac{1}{18}$

	$\frac{1}{3}$	-	$\frac{1}{4}$
=	$\frac{1}{12}$	-	$\frac{1}{12}$

	$\frac{1}{3}$	-	$\frac{1}{6}$
=	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{6}$

	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{8}$
=	$\frac{1}{24}$	-	$\frac{1}{24}$

	$\frac{1}{3}$	-	$\frac{1}{5}$
=	$\frac{1}{15}$	-	$\frac{1}{15}$

	$\frac{1}{3}$	-	$\frac{1}{9}$
=	$\frac{1}{9}$	-	$\frac{1}{9}$

	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{10}$
=	$\frac{1}{30}$	-	$\frac{1}{30}$

	$\frac{1}{3}$	-	$\frac{1}{12}$
=	$\frac{1}{12}$	-	$\frac{1}{12}$

	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{15}$
=	$\frac{1}{30}$	-	$\frac{1}{30}$

	$\frac{1}{6}$	-	$\frac{1}{18}$
=	$\frac{1}{18}$	-	$\frac{1}{18}$

	$\frac{1}{8}$	-	$\frac{1}{12}$
=	$\frac{1}{24}$	-	$\frac{1}{24}$